

平成 11 年度
埋蔵文化財緊急発掘調査概報

吉志部遺跡
垂水遺跡
高城B遺跡
高畠遺跡
高城遺跡
吉志部古墳

2000年3月

吹田市教育委員会

序

吹田市におきましては昭和49年度国庫補助事業の埋蔵文化財発掘調査以来、年々増加する開発行為に伴い、数多くの発掘調査を実施してきました。

平成11年度におきましては国庫補助事業として5件の発掘調査を実施しました。このうち、吉志部古墳は、吹田市内で唯一横穴式石室の遺存が確認できる古墳であり、古墳の保存と整備など将来的な活用を図る資料を得るために調査を行いました。今後これをもとに学校教育、生涯学習等の資料としての活用を図っていきたいと考えています。また、他の調査は住宅の建築を契機として実施したものです。これらの調査地はともに吹田市の南半部に位置し、市内でも早い時期から開発が進められた地域であります。今後、吹田市ではこれらの地域をはじめとして住宅の建替等の工事が増加するものと予想され、その際、文化財保護の面で協議を行い、円滑な調整が必要とされます。本市教育委員会におきまして、こうした調整をはかるべく日々努めておりますが、これを円滑に進めていくためには、やはり市民の方々のご理解を得ずには困難なものといえます。市民のみなさまにおかれましては発掘調査をはじめとする本市の文化財保護行政に対し、今後とも深いご理解とご協力を頂けますようよろしくお願い申し上げます。

平成12年3月

吹田市教育委員会

教育長 今 記 和 貴

例　　言

1. 本書は平成11年度国庫補助事業として実施した吉志部遺跡、高城B遺跡、高畠遺跡、吉志部古墳の緊急発掘調査をまとめたものである。また、平成10年度に国庫補助事業として実施した吉志部遺跡、垂水遺跡についても併せて報告する。
2. 発掘調査地点は次のとおりである。
(平成10年度)
吉志部遺跡 吹田市岸部北1丁目355-17、164-4
垂水遺跡 吹田市円山町360-2、1752-3
(平成11年度)
吉志部遺跡 吹田市岸部北1丁目283-13他
高城B遺跡 吹田市高城町1355-8
高畠遺跡 吹田市昭和町1473-2
高城遺跡 吹田市高城町1347-3
吉志部古墳 吹田市岸部北4丁目1388-2
3. 発掘調査の整理作業は吹田市岸部北4丁目10番1号、吹田市立博物館で実施し、資料の保管も同所において行っている。
4. 本文の執筆は、第1・7章 西本安秀、第2・3・6章 賀納章雄、第4章及び第5章1・2(1・2)・3 田中充徳、第5章2(3) 堀口健二が行った。
5. 図中の方位は磁北を示し、標高はT.P. (東京湾標準潮位) を示す。
6. 発掘調査において、曲谷保夫、勝田悦夫、今井敬子、井田透、吉井富子、清水正弘、高井敏昭、吉志部神社宮司 奥田富夫氏をはじめ、多くの方々の協力を得ました。記して謝意を表します。

発掘調査参加者名簿

調査主体 吹田市教育委員会

調査指導 大阪府教育委員会文化財保護課

調査担当 吹田市教育委員会吹田市立博物館文化財保護係
西本安秀・田中充徳・賀納章雄・堀口健二

調査員 大城道則

調査補助員 福島直子・佐藤健太郎・古川桂

目 次

第1章 平成11年度埋蔵文化財発掘調査の契機	1
第2章 吉志部遺跡の発掘調査	3
第3章 垂水遺跡の発掘調査	4
第4章 高城B遺跡の発掘調査	5
第5章 高畠遺跡の発掘調査	7
第6章 高城遺跡の発掘調査	16
第7章 吉志部古墳の発掘調査	18

挿 図 目 次

第1図 発掘調査地点	2
第2図 吉志部遺跡発掘調査地周辺図	3
第3図 平成10年度調査区平面図	3
第4図 平成10年度調査区土層断面図	3
第5図 平成11年度調査区平面図	3
第6図 垂水遺跡発掘調査地周辺図	4
第7図 調査区平面図	4
第8図 高城B遺跡発掘調査地周辺図	5
第9図 調査区配置図	5
第10図 土層断面図	6
第11図 造構平面図	6
第12図 出土遺物実測図	6
第13図 高畠遺跡発掘調査地周辺図	7
第14図 調査区平面図	7
第15図 調査区土層断面図	8
第16図 第1次造構平面図	10
第17図 第2次造構面平面図	11
第18図 第3次造構面平面図	12
第19図 出土遺物実測図	13
第20図 高城遺跡発掘調査地周辺図	16
第21図 調査区平面図	17
第22図 造構平面図	17
第23図 調査区土層断面図	17
第24図 遺物実測図	17
第25図 吉志部古墳周辺図	18
第26図 調査地周辺地形測量図	19
第27図 造構平面図	20
第28図 調査区土層断面図	21
第29図 石室実測図	22
第30図 吹田周辺地域古墳変遷図	24
第31図 現地説明会風景	26

図 版 目 次

図版1 吉志部遺跡（平成10年度）	図版6 高畠遺跡2	図版11 吉志部古墳1
図版2 吉志部遺跡（平成11年度）	図版7 高畠遺跡3	図版12 吉志部古墳2
図版3 垂水遺跡	図版8 高畠遺跡4	図版13 吉志部古墳3
図版4 高城B遺跡	図版9 高畠遺跡5	図版14 吉志部古墳4
図版5 高畠遺跡1	図版10 高城遺跡	

報告書抄録

ふりがな	へいせい11ねんどまいぞうぶんかざいきんきゅうはくつちょうさがいほう
書名	平成11年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報
副書名	吉志部遺跡 垂水遺跡 高城B遺跡 高畠遺跡 高城遺跡 吉志部古墳
卷次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	西本安秀 田中充徳 賀納章雄 堀口健二
編集機関	吹田市教育委員会
所在地	〒564-0041 大阪府吹田市泉町1丁目3番40号 TEL(06)6384-1231
発行年月日	西暦 2000年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° °'	東経 ° °'	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
吉志部遺跡	吹田市岸部北1-355-17ほか	27205	45	34° 46' 36"	135° 31' 53"	19990226	3 m ²	建物の 建築
吉志部遺跡	吹田市岸部北1-164-4	27205	45	34° 46' 38"	138° 31' 51"	19990507	6 m ²	建物の 建築
垂水遺跡	吹田市内山町360-2ほか	27205	86	34° 45' 54"	135° 30' 36"	19990323	8 m ²	建物の 建築
高城B遺跡	吹田市高城町1355-8	27205	117	34° 45' 25"	135° 31' 55"	19990825	4 m ²	建物の 建築
高畠遺跡	吹田市昭和町1473-2	27205	126	34° 45' 39"	135° 31' 54"	19990928～ 19991014	74.74 m ²	建物の 建築
高城遺跡	吹田市高城町1347-3	27205	116	34° 45' 30"	135° 31' 55"	19991006～ 19991008	9.5 m ²	建物の 建築
吉志部古墳	吹田市岸部北4-1388-2	27205	36	34° 46' 50"	135° 32' 04"	20000128～ 20000216	19 m ²	史跡内 容確認

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
吉志部遺跡	集落遺跡	旧石器・縄文時代	なし	なし	なし
吉志部遺跡	集落遺跡	旧石器・縄文時代	なし	なし	なし
垂水遺跡	集落遺跡	弥生時代・中世	なし	なし	なし
高城B遺跡	集落遺跡	古墳・平安時代	溝	土師器、瓦器、須恵器	なし
高畠遺跡	集落遺跡	縄文・古墳時代～ 中世	建物跡、溝	土師器、須恵器、黒色 土器、青磁、石器	建物跡 (平安)
高城遺跡	集落遺跡	平安時代～中世	ピット、土坑、溝	土師器、瓦器	なし
吉志部古墳	古墳	古墳時代	横穴式石室	須恵器、瓦	なし

第1章 平成11年度発掘調査の契機

平成11年度は、吉志部遺跡、高城B遺跡、高畠遺跡、高城遺跡、吉志部古墳の5遺跡において発掘調査を実施した。これらのうち、吉志部古墳以外は住宅建築工事に伴うものである。

吉志部遺跡は、旧石器～縄文時代を主とし、中世に及ぶ複合遺跡である。平成5年度に実施した第7次調査では旧石器時代の礫群を検出し、市内において旧石器時代の遺構として、初めて検出した。これ以降は顕著な遺構・遺物を確認していないが、これまでに出土した旧石器～縄文時代の石器により、この時期の人々の生活を窺い得る遺跡となっている。今回の調査地点は、遺跡の北端に位置し、平成11年5月7日に住宅建築に伴い包蔵状況の確認調査を実施した。

高城B遺跡は、縄文～古墳・平安時代、中世～近世の複合遺跡である。平成7年度に都市計画道路拡幅工事に伴う事前調査として発掘調査を実施し、縄文時代のフラスコ状の土坑、古墳時代の井戸跡、平安時代中期の建物群とそれを囲む大溝、平安時代～中世の土坑群など多様な遺構を検出し、縄文時代の石器、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、瓦質土器、瓦など多種多様な遺物が出土した。今回の調査地点は、高城B遺跡の東端に位置し、平成11年8月25日に住宅建築に伴い包蔵状況の確認調査を実施した。

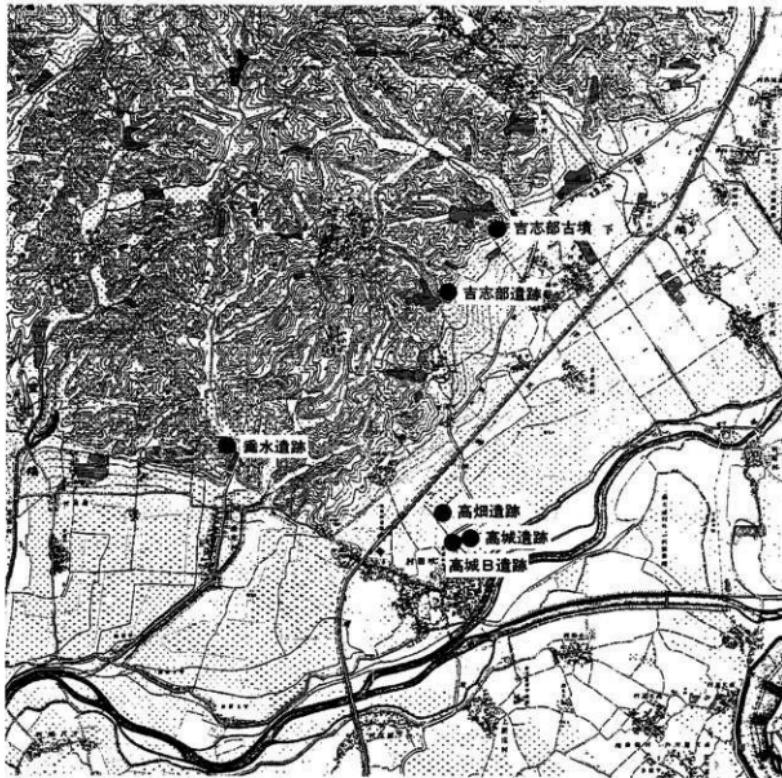
高畠遺跡は古墳・平安時代、中世を主とする集落遺跡である。平成8年度の調査では、平安末～鎌倉時代の建物跡を検出した。今回の調査地点では、住宅建築に伴い試掘調査を実施した結果、遺構・遺物を確認し、遺跡範囲が北東に拡大することが判明し、平成11年9月28日～10月14日に本発掘調査を実施した。

高城遺跡は平安時代、中世を主とする集落遺跡である。平成5年度の調査では、平安時代中期から後期の柱穴、土坑、溝等の遺構を検出し、黒色土器、土師器等の遺物が出土した。また、平成9年度の調査では平安時代～中世の溝、土坑、ピット等の遺構と土師器、須恵器、瓦器等の遺物が出土した。これまでの調査実施件数は少なく、遺跡の具体的な内容については、明確ではないが、平安時代から中世に及ぶ集落が展開するものと考えられる。今回の調査地点では、住宅建築に伴い事前に試掘調査を実施した結果、遺構・遺物を確認し、遺跡範囲が南西に拡大することが判明し、建築工事に抵触すると考えられる部分を対象として平成11年10月6日～10月8日に本発掘調査を実施した。

吉志部古墳は吉志部神社本殿東側の南斜面に位置する。昭和40年に所在が確認された後に、採土工事によって墳丘、石室が半壊し、石室用材が露出することとなった。この際に、鍋島敏也氏等が石室の略測を行い、現存の石室の規模が確認された。その後、昭和47年に吹田市・関西大学考古学研究室等によって石室及び墳丘の一部の調査が実施された。その際、無袖式の横穴式石室を内部主体とする古墳の内容の一端が判明した。調査後、確認された石室等は埋め戻されたが、古墳が斜面に立地していることから墳丘の流出が懸念され、また、今後の保存と整備など将来的な活用を図る資料を得るために、石室も遺存状況を確認することが必要と考えられ、

今回の調査の実施に至った。調査は平成12年1月28日～2月16日に行った。

なお、本概報においては、平成10年度に実施した発掘調査のうち、平成11年2月26日に調査を実施した吉志部遺跡（岸部北1丁目355-17、164-4）、同年3月23日に実施した垂水遺跡（円山町360-2、1752-3）の調査報告も併せて掲載する。



第1図 発掘調査地点 (1 : 40000)

第2章 吉志部遺跡の発掘調査

1. 調査の経過

吉志部遺跡での2件の調査は住宅の建築に伴うものである。平成10年度における調査は平成11年2月26日に、平成11年度の調査は平成11年5月7日に、それぞれ遺構・遺物包蔵の有無の確認を目的として実施した。

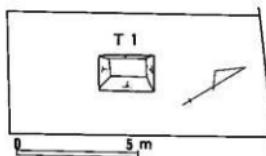
2. 調査の成果

平成10年度の調査では、調査トレンチを1か所設定して掘削を行い、現代盛土層以下、灰色砂質土層、地山層である淡青灰色砂質土層の堆積を確認したが、遺構・遺物については検出できなかった。

平成11年度の調査では、調査トレンチを2か所設定し、地表面から約1.5mまで掘削を行ったが、現代盛土層が認められるのみで、遺構・遺物については確認できなかった。



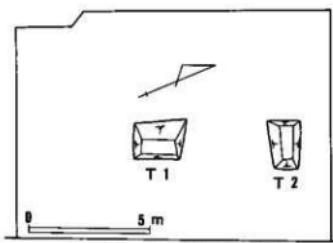
第2図 吉志部遺跡発掘調査地周辺図 (1:5000)



第3図 平成10年度調査区平面図



第4図 平成10年度調査区土層断面図



第5図 平成11年度調査区平面図

第3章 垂水遺跡の発掘調査

1. 調査の経過

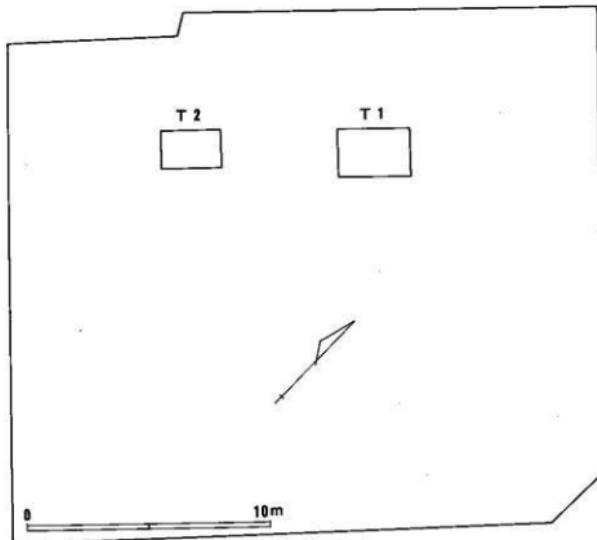
今回の調査は住宅の建築に伴うもので、造構・造物の包含状況を確認することを目的として実施した。調査については、平成11年3月23日に調査トレンチを2か所設定し、重機を用いて実施した。

2. 調査の成果

調査トレンチを地表下約2.5mまで掘削したが、当地はすでに宅地造成を受けており、現代盛土層が認められるのみで、造構・造物を確認することはできなかった。



第6図 垂水遺跡発掘調査地周辺図 (1:5000)



第7図 調査区平面図

第4章 高城B遺跡の発掘調査

1. 調査の経過

今回の発掘調査は、個人住宅建替工事に伴う事前調査で、吹田市高城町1355-8において実施した。

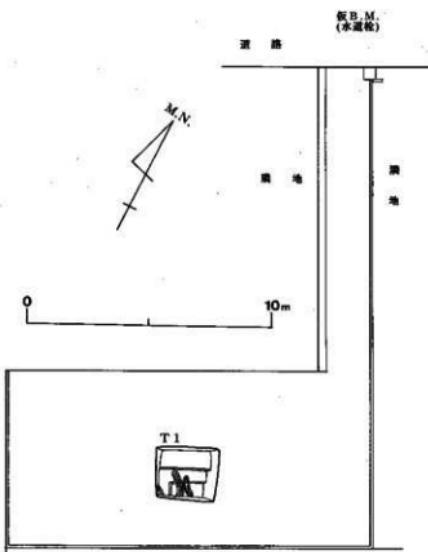
調査地は、高城B遺跡包蔵地域の東側標高T.P.約3.9mの住宅地内に位置する。今回の調査では、造構・遺物の包蔵状況を確認するため、平成11年8月25日に工事予定地内に約2.0m×2.0m（約4m²）の調査区1カ所を設定し、地表面から重機及び人力により掘削を進めた。その結果、鎌倉時代の造構面1面、平安時代の包含層1層を検出した。これらの造構等については慎重に調査を進め、写真撮影、平面図・土層断面図等の記録作成作業を行ったのち、調査区を埋め戻し、同日のうちに調査を終了した。

2. 調査の成果

調査区内の土層序は、厚さ約40~50cmの現代盛土層（第1層）以下、旧耕土層の濃青灰色粘土層（第2層）、淡青灰色粘質土層（第3層）が、さらにその下方には鉄分が多く含む茶褐色粘土層（第5層）、軟質の暗灰褐色粘土層（第6層）が水平に堆積し、地山である淡黄灰色粘土層（第8層）に達する状況がみられた。



第8図 高城B遺跡発掘調査地周辺図（1：5000）



第9図 調査区配図

上記の土層のうち、造構については地表面下深さ約1mに位置する第5層上面から、北西～南東方向の溝跡3条(溝1～3)を検出した。これらの溝は、幅約20～25cm、深さ約4～6cmを測り、砂混じりの淡灰色粘土層(第4層)を埋土としていた。さらに、遺物を包含する層(第6層)はその下から検出した。

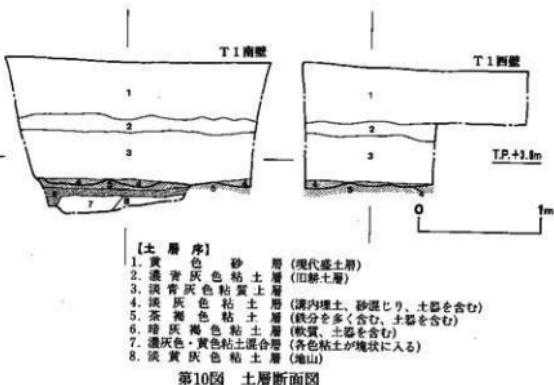
遺物については、発見された遺構の他、遺構面(第5層上面)及び遺物包含層からも出土した。溝内及び遺構面からは土師器皿・瓦器柄の破片数点が出土し、包含層からは須恵器の大型製品の破片(1)が出土した。このうち、遺構面から出土した土師器皿には、燈明皿とみられる内面に二次焼成を受けたものが含まれていた。また、須恵器大型製品の破片(1)については、直径約50.2cm(復元値)の円筒形で、外面に施すハケメ調整手法から井戸枠の可能性が考えられる。

3.まとめ

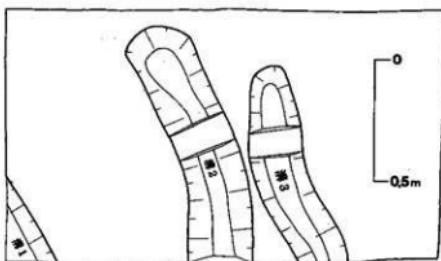
上記のように、今回の発掘調査では、調査区内から遺構・遺物が検出された。

遺構については、調査範囲が限られていて明確ではないが、同様な溝が併走しており、いわゆる鏽溝とみられる。今回の調査地の西方で行われた発掘調査でも、北西～南東方向の溝が多数みつかっており、これらと同様な性格の遺構と考えられる。

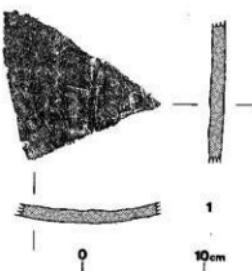
なお、出土遺物についてはいずれも細片であるが、これらの遺物より、溝等が発見された遺構面については鎌倉時代、その下に広がる遺物包含層については平安時代の所産と考えられる。



第10図 土層断面図



第11図 遺構平面図



第12図 出土遺物実測図

第5章 高畠遺跡の発掘調査

1. 調査の経過

今回の発掘調査は、専用住宅建替工事に伴う事前調査である。調査は吹田市昭和町1473-2において、平成11年9月28日より開始した。

調査地は、高畠遺跡包蔵地域北端の標高約5.7mの住宅内に位置する。建物の範囲のうち、約74.74m²を対象として、約3.95m×8.7mの調査区(G1)・約4.9m×8.5mの調査区(G2)の2カ所に一部重複させるように分割して、一方を調査する間、他方を土砂の仮置き場として順次調査し、平安時代から室町時代にかけての造構面3面、遺物包含層数層を検出した。これらの遺構等については、慎重に調査を進め、写真撮影、平面図・土層断面図等の記録作業を行ったのち、調査区を埋め戻して10月14日に調査を終了した。

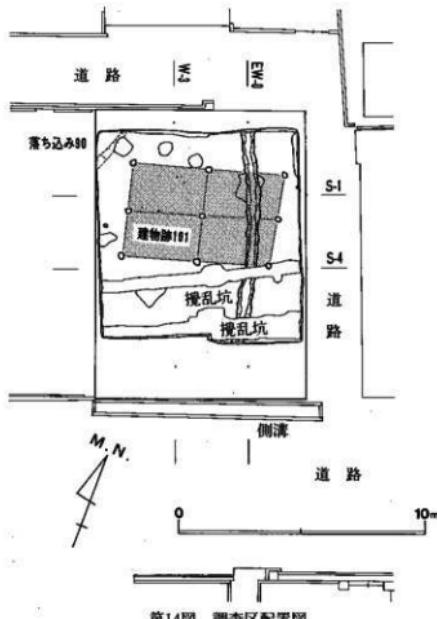
2. 調査の成果

(1) 基本土層序

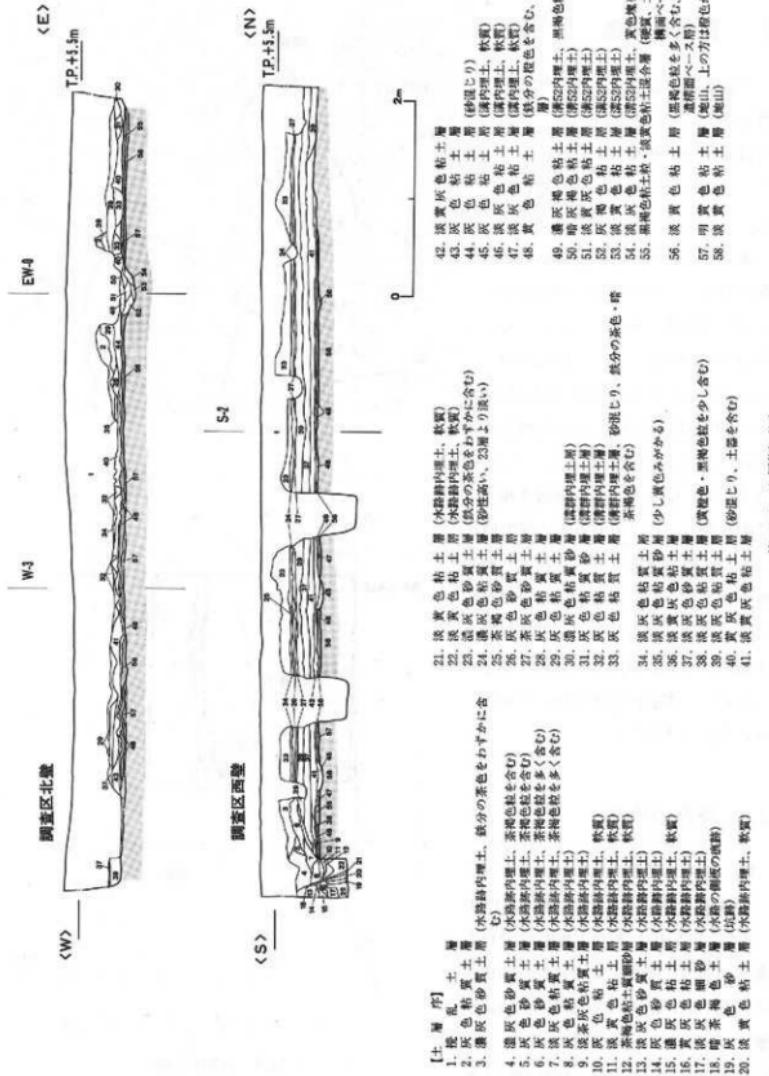
調査地の現在の地表面は標高(T.P.)約5.7m前後であり、擾乱を受けた北側の部分を除き、厚さ約10cmの現代盛土層(第1層)以下、旧耕土層(第23層)、灰色砂質土層(第24~27層)、灰色粘質土層(第29層)、淡灰色砂質土層



第13図 高畠遺跡発掘調査地周辺図 (1:5000)



第14図 調査区配置図



第15図 土層断面図

(第37層)、黄灰色の粘土層(第40・41・43層)、黄色粘土層(第48層)、黒褐色粘土層或いは黒褐色粒を多量に含む淡黄色粘土層(第55・56層)などの層が水平方向に薄く堆積し、さらに地表面下約60~65cmで地山の明黄色又は淡黄色の粘土層(第57・58層)に達する状況が確認され、これらの土層上面から3次にわたる造構面を検出した。

I層(第1層)

現代盛土及び搅乱土層。

II層(第23層)

濃灰色砂質土層で、近代以前の耕土層と考えられる。

III層(第24~27層)

砂質土を主体とする層で、水平方向に薄く幾層にも重なっていた。各層の厚さは約2~5cmである。

VI層(第40・41・43層)

厚さ約4~9cmの黄灰色粘土層で、この層の上面からは調査区全域にわたって南北方向の小溝を多数検出した(第1次造構面)。

VII層(第48層)

厚さ約1~2cmの軟質の粘土層で、VII層上を途切れ途切れに薄く堆積していた。この上面からは東西方向等の溝11条を検出した(第2次造構面)。

VIII層(第55・56層)

黒褐色粘土層或いは黒褐色粒を多量に含む淡黄色粘土層で、この層は本来下層のIX層と同質のものと考えられるが、二次的な流出と鉄分の混入により形成されたものと推測される。この層は、調査区の北西部分の一角が途切れていた他は、調査区全域に広がっていた。この層の上面の標高はT.P.約5.04~5.08mであり、掘立柱建物跡等の柱穴、南北方向の溝、落ち込みなどの造構を検出した(第3次造構面)。

IX層(第57・58層)

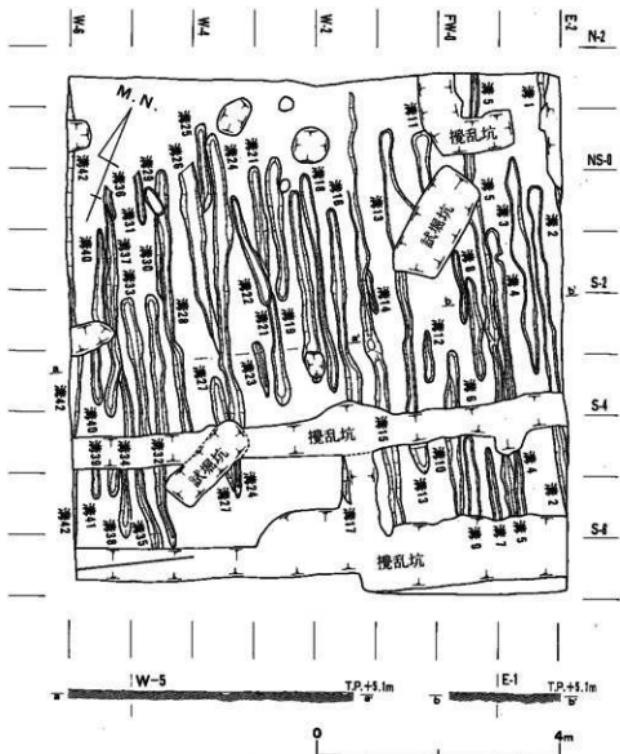
明黄色又は淡黄色の粘土層で、地山である。

(2) 造構

今回検出された造構面は、VI層・VII層及びVIII層の各層上面3面である。最も上から検出された第1次面からは南北方向の小溝42条(溝1~42)を検出し、第2次面からは溝11条(溝51~61)を検出した。さらに、VIII層上面で検出された第3次面では溝1条(溝71)、柱穴9基(P72~P80)、ピット1基(P81)、杭跡8基(P82~P89)、落ち込み1カ所(落ち込み90)を検出した。検出した9基の柱穴から、少なくとも1棟分の掘立柱建物(建物101)が復元できた。

a. 第1次造構面(第16図)

(a) 小溝1~42



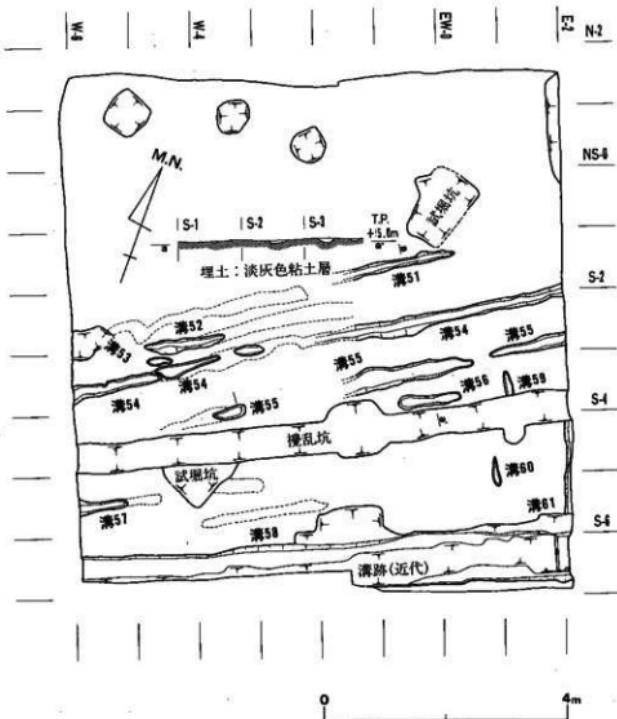
第16図 第1次造構面平面図

擾乱の著しい調査区北側を除いて、造構面全面を覆うように併走する。幅10.5~37.0cm、深さ0.7~7.9cm、方位N17°54'~56°24'Wを測り、淡灰色粘質土・灰色砂質土等を埋土とする。

b. 第2次造構面(第17図)

(a)溝51~61

S-1ラインより南に分布する、主に東西方向の溝群である。溝51~58は、幅10.5~37.0cm、深さ0.7~7.9cm、方位N56°36'~62°Wを測り、砂混じりで軟質の淡灰色か灰色の粘土等を埋土とする。



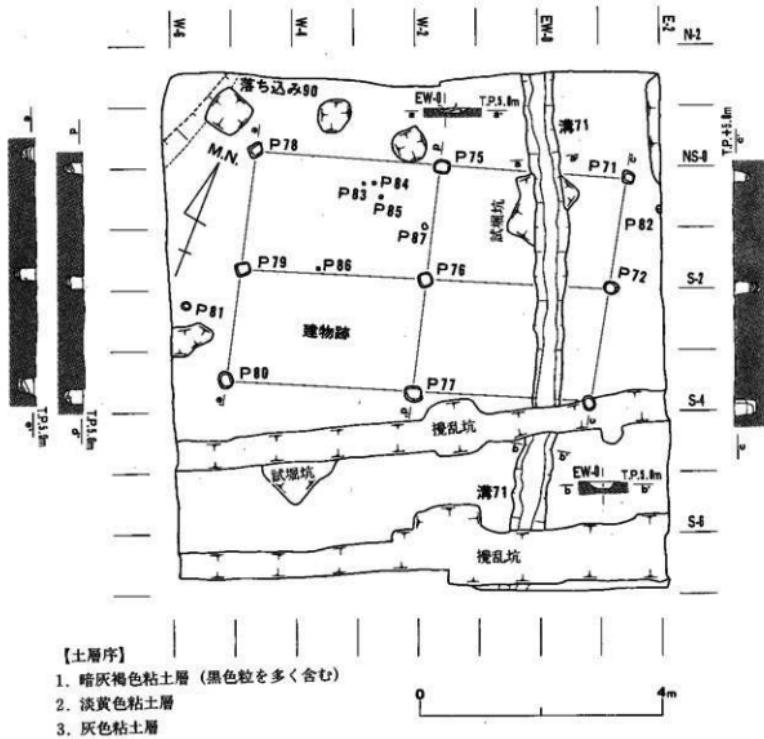
第17図 第2次遺構面平面図

c. 第3次遺構面 (第18図)

(a)建物101

調査区内で検出された柱列は2間×2間であるが、最も東側の柱列と他の柱列との間に、南北方向の溝が継続していることから、2棟以上の建物が並んで建っていた可能性も考えられる。桁行3.85~3.89m、梁間6.15~6.32mを測り、棟の方位は桁行N11°~13°24'E、梁間N71°48'~73°18'Eと柱列毎にやや異なり、形状も平行四辺形を示す。

柱穴は9基(P72~80)を検出し、円形もしくは隅丸方形である。直径又は一辺の長さは18~29.5cm、深さ21.8~43.8cmを測る。埋土は、下層には黄色・灰色等の粘土が幾層にも薄く重なり、その上には硬質の濃灰褐色粘土層が厚く堆積、さらにその周囲には灰色粘土層が幅1~2cmで巡っていた。このうちの濃灰褐色粘土層が柱底と推測される。柱穴内からは、土師器の細片の他、11世紀後半頃とみられる黒色土器壺、5世紀初頭及び6世紀後半とみられる須恵器蓋杯・高杯脚部などの破片が出土した。



第18図 第3次造構面平面図

(b)溝71

調査区内のEW-0ライン付近を南北に延びる溝で、幅41.0~60.0cm、深さ6.4~11.8cm、方位N26°48'~1°36'Wを測り、埋土は濃灰褐色粘土層等(第49~54層)である。円弧を描くかのように、S-1・S-4・S-6の各ライン付近で徐々に方向を転じていた。

(3) 出土遺物

今回出土した遺物は、土師器甕・鍋・皿等、須恵器蓋杯・甕・壺・高杯・蓋・器台・こね鉢等、黒色土器椀・瓦器椀、瓦質土器羽釜・甕・青磁椀・石鍋・石鑓・動物齒等であり、遺物収納箱1箱分に相当する。出土地点は、造構面の上下に展開する包含層、溝や柱穴などの造構内及び造構面であり、その殆どが細片であった。そのため、実測可能な遺物は18点にとどまったが、本書においては、実測の可能な限り報告した。

(2)~(4)は土師器小皿である。(3)は底部から体部が若干外反ぎみに張り出し、口縁端部を面



第19図 出土遺物実測図

取りする。(2)は伊野分類のIタイプ(15世紀)、(3)はJタイプ(13世紀末~14世紀初め)、(4)はGタイプ(14世紀以降)と思われる。

(5)は和泉型瓦器椀で、体部外面は指頭圧調整を、内面にのみミガキを施す。尾上編年のⅢ-2期(12世紀末~13世紀初め)に相当する。

(6)~(7)は土器器で、深めの皿である。(7)は口縁先端を上向きに折り返し、端部内面は沈線状を呈する。小森・上村編年のⅣ期新型式(15世紀中葉)に相当する。

(8)~(10)は須恵器である。(8)は壺口縁部で、端部は強い横ナデにより凹線状を呈する。(9)は小形の鉢、(10)はこね鉢で、拡張された口縁端部が内側へ「く」の字に屈曲する。山仲編年神出窯D₂(14世紀)に近いかと思われる。

(11)・(12)は瓦器である。(11)は椀で、口縁端部はわずかに外反し、端部内面側に沈線が巡る。橋本編年Ⅲ-1~-2(13世紀前葉)に近いかと思われる。(12)は小皿で、内面にミガキを施し、口縁部は外反して体部に段を持つ。駒井分類の瓦器皿D~F類(凡そ13世紀前~中葉)に近いと思われる。

(14)は滑石製の石鍋である。口縁直下に削り出しの鋸が巡る土釜形で、木戸編年のⅢ b類(13世紀)に近いかと思われる。

(15)・(16)は須恵器である。(15)は杯蓋の宝珠つまみ部分で、陶邑(田辺)編年のMT21号窯期(8世紀前半)に相当する。(16)は器台脚部である。突帯を上下の沈線によって作り出し、沈

線によって区画される文様帶に、透かしと9条1組の波状文を施す。TK208～TK23号窯期(5世紀後半)頃と考えられる。

(17)は陶質土器の高杯蓋と思われる。返りは剥離のため欠損する。稜近くに8条1組の波状文を施す。

(18)は凹基無茎石鎌である。ほぼ完形だが、風化が著しい。石材はサヌカイトで、法量は器長約1.7cm、器幅約1.85cm、器厚約0.3cm、重さ約0.615gを測る。縄文時代の所産と考えられる。

3.まとめ

上記の出土遺物等より、第1次造構面は鎌倉時代後半～室町時代前半、第2次造構面は平安時代末～鎌倉時代前半、第3次造構面は平安時代中頃の所産と考えられる。

このうち、第3次面からは、動溝で構成される他の造構面(第1・2次面)と異なり、建物跡が検出された。この建物跡については、柱穴内出土の遺物から平安時代中頃の所産と考えられるが、柱穴に重複等の痕跡が認められなかったことから、この建物については建替されずに比較的短期間の利用で放棄された可能性が考えられる。その後の造構が動溝であることから、居住地から耕地へと土地利用の方法が変化し、その後は近代に至って土地区画整理事業による宅地化が進行するまで変わることがなかったことを示していた。また、溝71はこの建物跡101の柱穴間を縦断して検出された。緩やかな曲線を描いているが、その用途は不明である。また、建物を構成する柱穴の埋土と似た土壤であり、それほど異なる時期の所産とみられるが、この溝からは黒色土器や土師器等に混ざって瓦器の細片1点が含まれていた。建物跡よりやや新しい時期のものとも考えられるが、同時期に開削され建物の廃絶後も、溝のみは機能し続けていた可能性も考えられる。

なお、今回の調査では、上記の他に縄文時代の石鎌、5世紀前半の初期須恵器、6世紀後半の須恵器、奈良時代の須恵器が出土した。当遺跡の南側に展開する昭和町遺跡・高城B遺跡でも、これらと同時期頃の造構・遺物が出土しており、当地付近にもこれらの時期の遺跡が広がっていた可能性が考えられる。しかしながら、それらの造構・遺物の展開は、出土遺物で見る限り5世紀前半・6世紀後半・平安時代中頃などと断続的であり、明確な継続性はみられなかった。そのなかでも、特に平安時代中頃の造構・遺物については、高城B遺跡など、平安時代中頃の建物が数回の建替を経て、短期間で廃絶した後は耕地へと変わり、同地に建物が建てられた痕跡がみられなくなるような似た状況があり、この地域には何らかの通有の事情があった可能性が考えられる。

今回の調査地の一帯は、千里丘陵東南側の裾野に当たる。平成7年度に実施された高城B遺跡第1次調査により、平安時代中頃までのこの地域一帯は低い丘と谷とが交互に延び、起伏を繰り返す土地であったことがわかつてきた。さらにこの調査では、丘の部分からは建物跡数棟

や粘土探掘坑と考えられる土坑群などがみつかり、徐々に埋没しつつあった谷の部分からは鋤溝とみられる遺構が検出されていた。このように、耕地が谷間に限定されたため、集約的な農業が形成されにくい状況であったものと考えられるが、のちの谷の埋没或いは人為的な造成により、丘の部分さえも耕地化されていったとみられる。これに加えて、千里丘陵の東側の丘陵地形上に分布する元町遺跡・高畠遺跡・高城遺跡・高城B遺跡等の遺跡では、いずれも耕地へと変貌する動きを示しており、自然地形等に依拠した粗放的な農業から集約的な農業への変化が、この地域では平安時代末以降広範に行われたのではないかと推測される。

～参考文献～

- 駒井正明『山直中遺跡』1988年 勿大阪府埋蔵文化財協会
小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年研究」「研究紀要」第3号
1996年 勿京都市埋蔵文化財研究所
田辺昭三『須恵器大成』1981年 角川書店
山仲 進「神出窯における系譜、構造、編年」「神出」1986年 妙見山麓遺跡調査会
山田邦和編『平安京出土土器の研究』1994年 財團法人古代學協會
中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』1995年 真陽社
吹田市都市整備部・吹田市教育委員会
『高城B遺跡』—都市計画道路佐井寺片山高浜線工事に伴う発掘調査報告書—1999年

第6章 高城遺跡の発掘調査

1. 調査の経過

調査地は、もとは高城遺跡の周辺地にあたり、平成11年7月28日に試掘調査を実施したところ、新たに高城遺跡の包蔵地として確認された地点である。今回の発掘調査は、予定の建築工事によって遺跡の破壊が考えられる箇所を対象に実施したものである。調査については、平成11年10月6～8日に調査区を1か所設定し、重機および人力掘削により実施した。

2. 調査の成果

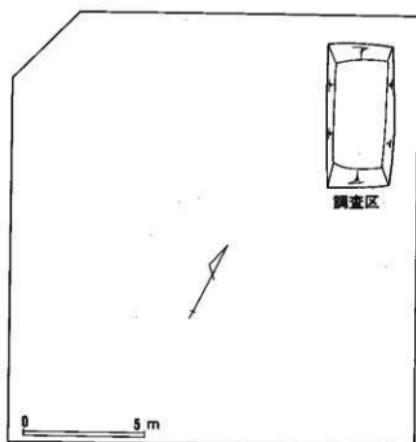
調査トレンチを掘削したところ、盛土層・旧耕土層以下、主に青灰色砂質土（3～5層）、灰褐色粘土・粘質土（6～14層）、黄灰色・青灰色砂質土（18層）の堆積が認められた。これらのうち、灰褐色粘土・粘質土層である7・8層と11～14層とで古墳時代・平安時代・中世の遺物が検出され、7・8層（遺物包含層上層）では中世の遺物が、11～14層（遺物包含層下層）では平安時代の遺物が主として認められた。

遺構については、ピット2基、土坑3基、溝1条を、遺物包含層下層下の18層上面をベース面として検出した。土坑1は、2cm以下の礫が混じる灰褐色砂質土を埋土とし、深さは約2～8cmを測った。土坑2は、灰褐色粘質土を埋土とし、南北両側部分がやや陥没、深さは約8cmを測った。土坑3は、淡灰褐色砂を埋土とし、深さ約10cmを測った。ピット1・2及び溝1は、深さが3～5cmと浅く、埋土は灰褐色粘質土であった。これらの遺構内からは主として平安時代末を中心とする遺物を検出することができた。遺物1・2は土師器皿、遺物3は瓦器碗、遺物4は土師器釜であり、遺物1は土坑1、遺物3は土坑3、遺物2・4は遺物包含層下層より検出された。

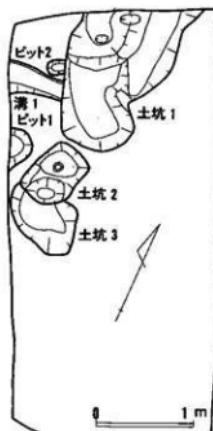
以上のように、発掘調査では平安時代末頃のものとみられる遺構を確認することができた。遺構の性格については調査区が限られていたために明確ではないが、高城遺跡ではこれまでの調査においても同時期を中心とする遺構・遺物が検出されており、当地一帯では平安時代に集落が展開していたものと考えられ、今回の成果もこれに関連するものと思われる。



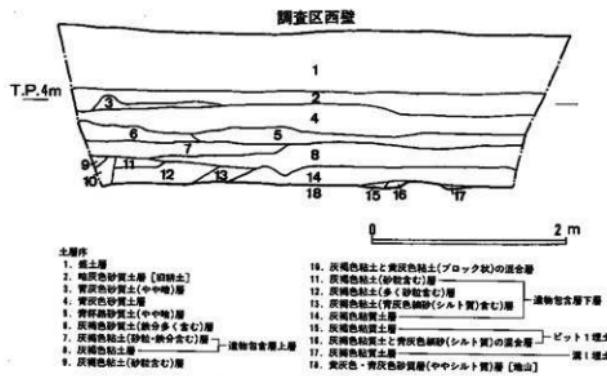
第20図 高城遺跡発掘調査地周辺図 (1:5000)



第21図 調査区平面図



第22図 造構平面図



第23図 調査区土層断面図



第24図 遺物実測図

第7章 吉志部古墳の発掘調査

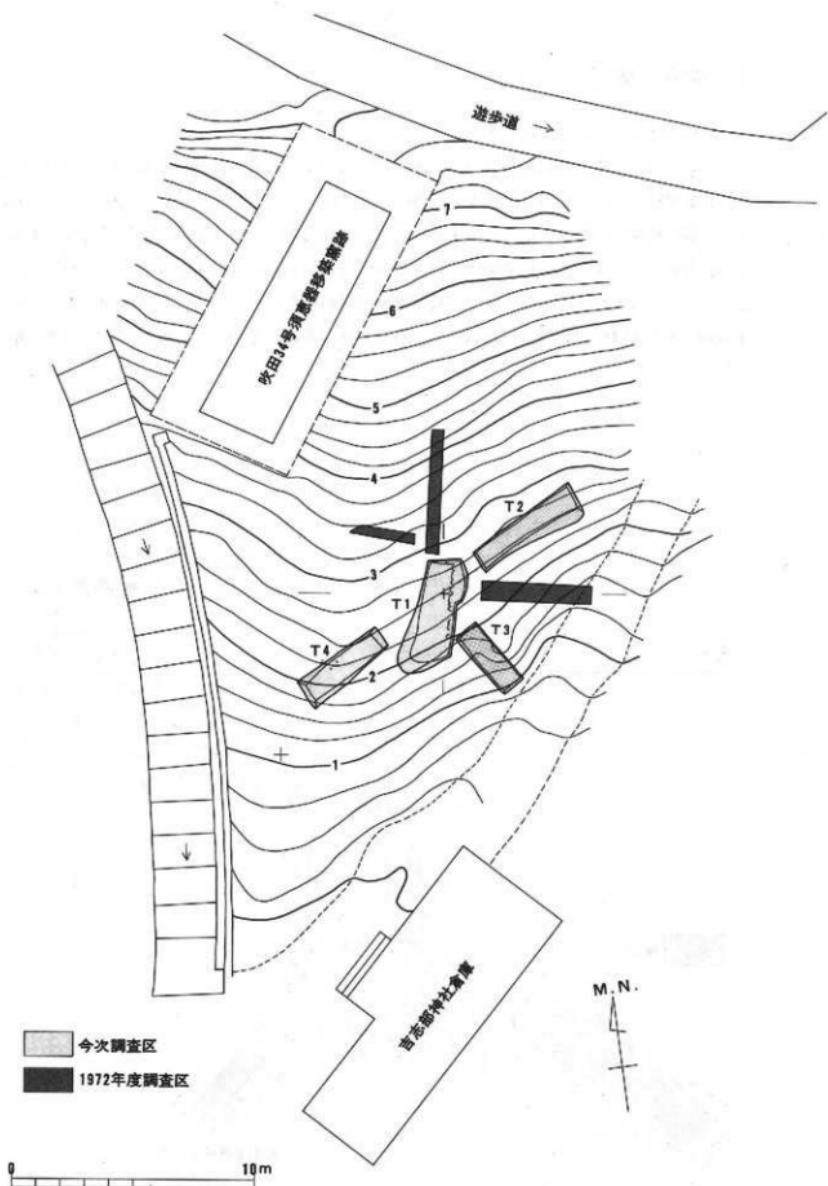
1. 調査の経過

今回の調査は吹田市岸部北4丁目1388-2、吉志部神社本殿東側の南斜面において、石室及び墳丘の状況の確認を目的として平成12年1月28日から2月16日にかけて実施したものである。調査では、石室部分、石室の東北部分、同南東部分、同南西部分にそれぞれ1か所ずつ（T1～T4）トレーナーを設定し、上部表土層を機械で掘削し、その下を順次人力で掘削を行った。調査面積は合計約19m²である。その結果、T2・3で封土の一部が検出され、若干の遺物の出土があった。また、石室の再発掘も行ったところ、石室用材の一部にひびが認められたため、石材強化剤の塗布を行い、補強を行った。検出した造構や土層堆積状況などの写真撮影・図面作成等の記録作成後、埋め戻しを行って調査を終了した。

なお、2月13日（日）には市民約50名の参加を得て現地説明会を開催し、調査状況を説明した。



第25図 吉志部古墳周辺図

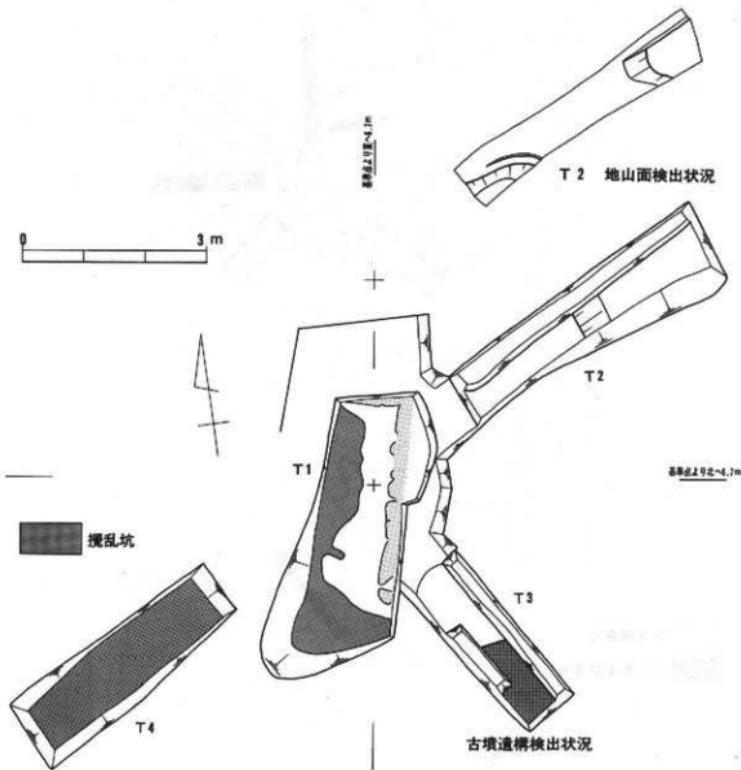


第26図 調査地周辺地形測量図

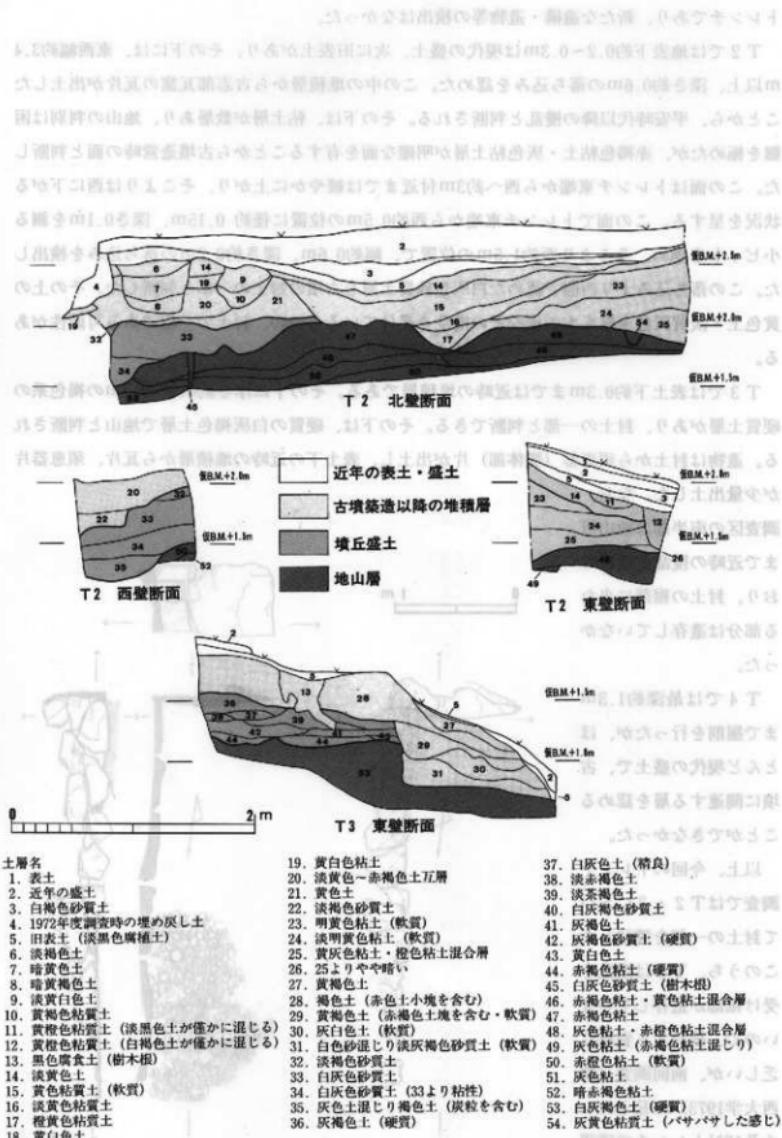
2. 調査の成果

調査の所見をトレンチごとに記すこととする。

T 1 では内部主体の再発掘を行い、状況確認を行った。内部主体は無袖式の横穴式石室で、奥壁と東側壁の一部が遺存する。石室の現存部分は長さ3.3m、幅1.1m、高さ0.6mを測る。石室に用いられた石材は硬砂岩で、千里丘陵では産出しない石材であり、周辺では北摂山地などで産出するとされる。石材の使用法は、奥壁は基底面に置かれた薄い板石1枚と小さな石を縦積みし、その上の2段目のような石及び側壁は横積みを行っている。石室床面南半部には径約5cm内外の河原石の石敷きが確認され、石室全面に敷かれていたものと思われる。再発掘の



第27図 遺構平面図



(左) 第28図 調査区土層断面図

トレンチであり、新たな遺構・遺物等の検出はなかった。

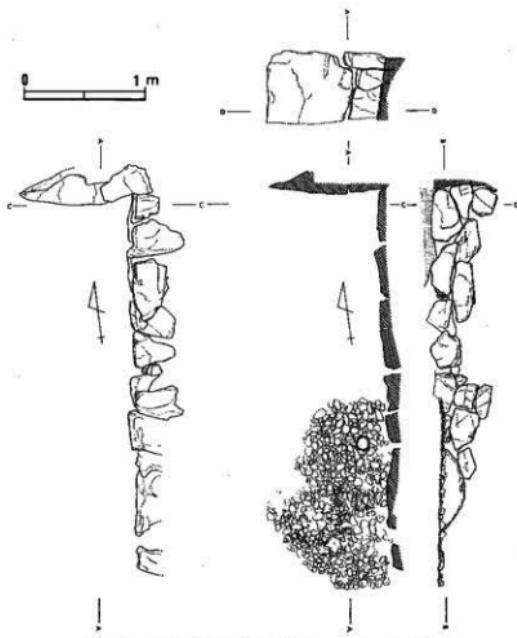
T 2 では地表下約0.2~0.3mは現代の盛土、次に旧表土があり、その下には、東西幅約3.4m以上、深さ約0.6mの落ち込みを認めた。この中の堆積層から吉志部瓦窯の瓦片が出土したことから、平安時代以降の擾乱と判断される。その下は、粘土層が数層あり、地山の判別は困難を極めたが、赤褐色粘土・灰色粘土層が明確な面を有することから古墳造営時の面と判断した。この面はトレンチ東端から西へ約3m付近までは緩やかに上がり、そこよりは西に下がる状況を呈する。この面でトレンチ東端から西約0.5mの位置に径約0.15m、深さ0.1mを測る小ピットを認め、そこより西約1.5mの位置で、幅約0.6m、深さ約0.2mの落ち込みを検出した。この落ち込みより西側で認めた白灰色砂質土層を古墳の封土の一部と判断した。その上の黄色土・淡黄灰色土層も木の根などの擾乱を受けているものの、封土の一部である可能性がある。

T 3 では表土下約0.3mまでは近時の堆積層である。その下に厚さ約0.2~0.3mの褐色系の硬質土層があり、封土の一部と判断できる。その下は、硬質の白灰褐色土層で地山と判断される。遺物は封土から須恵器（整体部）片が出土し、表土下の近時の堆積層から瓦片、須恵器片が少量出土した。なお、

調査区の南半部は地山層
まで近時の擾乱を受けて
おり、封土の裾部に当た
る部分は遺存していなか
った。

T 4 では最深約1.3m
まで掘削を行ったが、ほ
とんど現代の盛土で、古
墳に関連する層を認める
ことができなかつた。

以上、今回のトレンチ
調査ではT 2・3において
封土の一部を確認した。
このうち、T 3は擾乱を
受け裾部が遺存していな
いので、検討する資料に
乏しいが、前回調査（関
西大学1973）のEトレンチ
及びNトレンチで確認
された古墳封土の位置関



第29図 石室実測図〔(関西大学1973)より引用〕

係を合わせて、墳丘の規模について検討すると、ほぼ半径約4.7mで位置合わせができる、直径約9.5mの円墳に復元できる。また、Nトレンチで、遺存した封土の北側に、僅かに地山の窪んだ状況が見られ、これがT2の落ち込みにつながるのであれば、いわゆる山寄せの古墳に見られる周溝に当たる可能性がある。ただし、Eトレンチではその痕跡は認められないため、そこまでは及んでいないのかもしれない。出土遺物はT2の平安時代以降の擾乱層から瓦片、T3の封土から須恵器（縦体部）片、表上下の近時の堆積層から瓦片、須恵器片が少量出土した。図化できるものではなく、前回調査の遺物に関して補足・修正するものはなかった。

3.まとめ

吉志部古墳の墳丘、石室等の構造については、前回の調査で明確にされたことが多く、これに今回の調査成果を合わせまとめる。吉志部古墳は丘陵南斜面の中腹に築かれ、墳丘の大部分は流失しているが、直径約9.5mの円墳と推定される。墳丘後背部に周溝が設けられた可能性がある。内部主体は南に開口する無袖式の横穴式石室で、石室の現存部分は長さ3.3m、幅1.1m、高さ0.6mを測る。石材の材質は硬砂岩である。床面には河原石の石敷きが確認される。なお、石室及び墳丘の構築順序は、①丘陵斜面を削平し、南半部は土を積んで平坦にする。②粘土と礫で床面を築いた後、石室奥壁・側壁等の石材を構築しながら封土を盛るというように行われたと考えられる。

出土遺物は、石室内から須恵器（杯身、長頸壺片、壺片）、土師器（小破片）、鉄器（刀子、鎌、釘）、玉類（ガラス玉）など、調査トレンチからは須恵器片、瓦片などが出土した。石室内より釘が出土したことから、木棺が納められたものと思われる。追葬の有無については不明であるが、石室の長さが3.5～3.7m前後に復元できるならば、二棺縱列葬が可能であり、石室幅が1m以上であれば二棺併列葬が可能であるという（服部1988）。複葬、複次葬（白石1982、服部1988）がされた可能性がある。古墳の構築時期については、石室内出土須恵器（杯身）が中村編年（中村1980ほか）II-6段階のものであり、古墳時代終末期に属する7世紀前半と推定される。ただ、墳丘に設定されたトレンチからは、それより古い様相を呈するII-5段階と思われる須恵器（杯身・杯蓋）が出土しており、古墳築造時期と関連するのか別途のものか判断しない。なお、前回調査では、Eトレンチ地山直上で木炭層の薄い広がりとその横で破碎されたと思われる長頸壺頸部の破片が検出され、古墳築造前の何らかの行為と考えられたが、今回の調査では確認できなかった。

吉志部古墳の石室・墳丘の規模及び出土遺物の内容は、同時期頃の群集墳を構成する古墳と比較して、さほど突出したものでなく、標準的なものと思われる。したがって、吉志部古墳は単独墳とは考えにくく、他にも古墳が存在し、複数の古墳で群集墳を構成したものと思われる。

さて、吉志部古墳が古墳時代の吹田地域で占める位置について考察するに当たり、いくつかの視点で検討を行いたい。

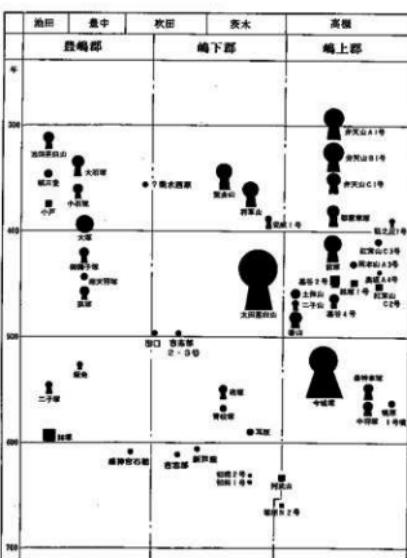
まず、北摂地域（高槻市、茨木市、吹田市、豊中市、池田市）の古墳変遷の状況から、吉志部古墳の位置について述べたい（第30図参照）。

北摂地域は旧郡名で鳴上郡、鳴下郡、豊鳴郡と分かれ、それぞれの郡単位で首長墓の変遷を追うことができるようである。鳴上郡では、弁天山A1号墳から始まる前方後円墳を主体とする首長墓と関連古墳の密な古墳の系統がある。鳴下郡では、紫金山古墳から始まり、鳴上郡に比較し弱い系統があり、豊鳴郡では池田茶臼山古墳や大石塚古墳から始まるやや弱い古墳の系統がある。それらは5世紀代に至っても継続し、6世紀代には群集墳が築造され、小規模古墳の大幅な増加を見るが、7世紀代になると新たな造墓は極めて少なくなる。7世紀代の造墓の急激な減少は畿内の一般的な傾向でもある。

一方、吹田市では4世紀代の古墳として垂水西原古墳が確認されているが、竪穴式石室の用材が検出されたのみで詳細は明らかでない。5世紀末には出口古墳、吉志部2・3号墳が築造された。出口古墳は金環、須恵器等の出土遺物が残されているが、古墳の構造等の詳細は明らかでない。吉志部2・3号墳は尾根上に位置し、墳形・規模と内部構造は不明なもの、埴輪を有し、尾根上に造墓を展開する古式の群集墳の一部と考えられる。7世紀代の古墳として吉志部古墳の他、新芦屋古墳、感神宮所在石棺が認められ、千里丘陵東～南縁沿いに散在して分布する。そのうち、感神宮所在石棺は家型石棺蓋が残るのみで詳細は不明である。新芦屋古墳は横口式石棺を納めた木芯粘土室を内部主体とし、鉄地金銅張馬具、鉄刀、金環、玉類、須恵器、土師器等多くの遺物が出土しており、単独墳と考えられる。

このように吹田市内の古墳のありかたは、新芦屋古墳のみ7世紀代の北摂地域において傑出した内容を持つといえるが、全般的に古墳の分布は散在的で造営された古墳は少なく、首長墓も認められず、特に豊鳴郡域では、5～6世紀に限れば古墳が認められない。このような中で吉志部古墳は北摂地域で新たな造墓がなくなる時期に、あえて築造された古墳と評価され、吹田市域では現在確認されている中で最も新しい古墳の一つに位置付けられる。

さて、吉志部古墳が群集墳の構成墳である可能性を先に指摘したが、具体的にどのようなも



第30図 吹田周辺地域古墳変遷図
 石野博信編「全国古墳編年集成」1995年を改変)

のであるのかを次に群集墳の視点から検討したい。

群集墳については、先学によりこれまで様々な角度から研究が進められ、特に群集墳の終末の視点で森浩一氏（森1970）、水野正好氏（水野1970）、白石太一郎氏らにより分類がされてきた。その中でも白石太一郎氏の分類が、最近の調査成果により一部修正を必要とするものの大筋では支持されている。それによると、一般に畿内の群集墳は6世紀前半から造営が始まり、7世紀初頭で築造が終了するタイプ（高安型）と6世紀中葉から造営が始まり、7世紀後半まで造墓及び追葬を行うタイプ（平尾山型）、7世紀に入ってから造墓を始め、7世紀末まで続くタイプ（長尾山型）に分類される（白石1982）。

これらのタイプの内、高安型及び平尾山型との関連で吉志部古墳を検討すると、まず、吉志部古墳の北方約100mに位置する吉志部2・3号墳との関係が問題となる。同一の丘陵に存在することから何らかの関係があることは想定できるものの、立地が異なり、やや距離も離れ、築造時期も継続性がないことから、同一支群と見ることはできないといえる。また、高安型及び平尾山型は6世紀後半頃に古墳の築造が最もピークとなるが、その時期前から当地では吹田29号窯（中村編年II-3・4段階 6世紀中葉～後半）が操業を始め、以後2号窯等が構築されて駿河ヶ池支群が構成される（藤原1993）ように、須恵器生産が行われたこともあり、古墳が築造された可能性は低く、該当しないものと思われる。

次に、長尾山型は近年調査例の増加とともに終末期群集墳と呼称することが一般的となっている。その特徴は、南面する斜面に立地し、墳丘は方形や不整な円形を呈し、ほとんど墳丘の認められないものがあること、内部主体は無袖式横穴式石室の他、小石室、木棺直葬、木炭桶などがあり、棺は主に木棺が使用され、副葬品は少量の土器など全般的に貧弱であることが指摘されている（森本1995）。また、終末期群集墳の内部主体の構造差は、時期差と考えられ、無袖式横穴式石室一小石室—木棺直葬に変遷するとされる（花田1988、服部1988）。

吉志部古墳は、立地、外部・内部構造など終末期群集墳に一致するが多く、これに分類できると考えられる。また無袖式横穴式石室を内部主体とする点と、出土遺物は須恵器の他に刀子、鉄鎌、玉類等が認められ、後期群集墳の様相を残す点から、終末期群集墳の中でも当初期の古墳と考えられる。

さて、吉志部古墳の西方約130mに位置する吉志部火葬墓は、吉志部瓦窯造営の直前の時期（8世紀末）に営まれたと考えられ、瓦窯との関連性が注目されてきた。火葬墓は工事中に発見されたため、埋納状況などの詳細は明らかではないが、その構造は火葬骨を納めた蔵骨器（有蓋短頸壺）を墓坑の中に置き、火化の際の木炭灰を墓坑に充填したものと考えられる。

火葬墓が終末期群集墳の造墓終了後に同一地か近隣地で築造され、同一系統と推察される例が指摘されており（服部1988、花田1988）、また、終末期群集墳の造営終了後、40～50年の空白期間を経て火葬墓が出現するという河内での調査例をもとに終末期群集墳と火葬墓が密接な関係をもち、同一氏族による造墓が行われたと想定され（安村1999）、吉志部火葬墓もこうしたものへの可能性が残されている。吉志部古墳から吉志部火葬墓間の丘陵南斜面は墓域として意

識され、吉志部瓦窯造営の直前まで造墓が続けられていたのかもしれない。

以上、検討するにはあまりにも少ない資料であるが、吉志部古墳は終末期群集墳に分類でき、7世紀前半代に紫金山の丘陵南斜面に造墓が開始された当初期の古墳と考えられる。以後は、吉志部火葬墓の築造のように、丘陵南斜面の部分は墓域として意識され、吉志部瓦窯が構築されるまでは造墓が行われたと思われる。ただ、紫金山の丘陵南斜面は吉志部瓦窯構築の際に大幅に造成された可能性が高く、他に古墳・火葬墓等が認められない現状では、指摘するに止めたい。

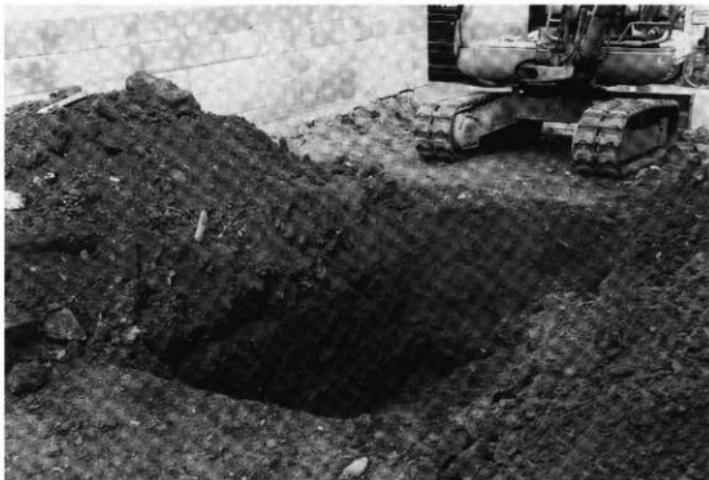
引用文献

- (森1970) : 森 浩一「古墳時代後期以降の埋葬地と葬地—古墳終末への遷及的試論としてー」『古代学研究』57号 1970年
- (水野1970) : 水野正好「群集墳と古墳の終焉」『古代の日本』5 1970年 角川書店
- (関西大学1973) : 関西大学考古学研究室ほか『吉志部古墳発掘調査報告』1973年
- (中村1980ほか) : 中村浩『陶邑』I・II・III・IV 1976・1977・1978・1979年 大阪府教育委員会
- (白石1982) : 白石太一郎「畿内における古墳の終末」『国立歴史民俗博物館研究報告』第1集 1982年
- (花田1988) : 花田勝広「律令制の確立にみる葬地の変革」『信濃』第40巻4号 1988年
- (服部1988) : 服部伊久男「終末期群集墳の諸相」『樞原考古学研究所論集』第9 1988年
- (藤原1993) : 藤原 学「須恵器窯と燃料薪」『関西大学考古学研究室開設四十周年記念考古学論叢』1993年
- (森本1995) : 森本徹「大阪の終末期群集墳」『古代学研究』第132号 1995年
- (安村1999) : 安村俊史「火葬墓を内包する終末期群集墳—畿内の事例の基礎的考察ー」『古代文化』第51巻11号 1999年

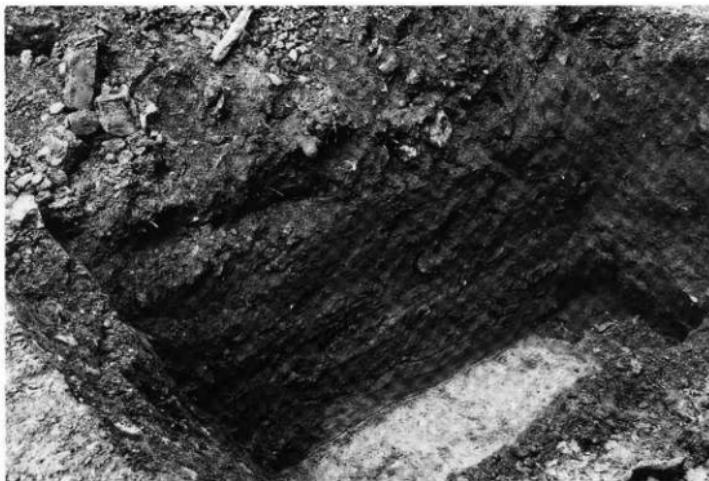


第31図 現地説明会風景

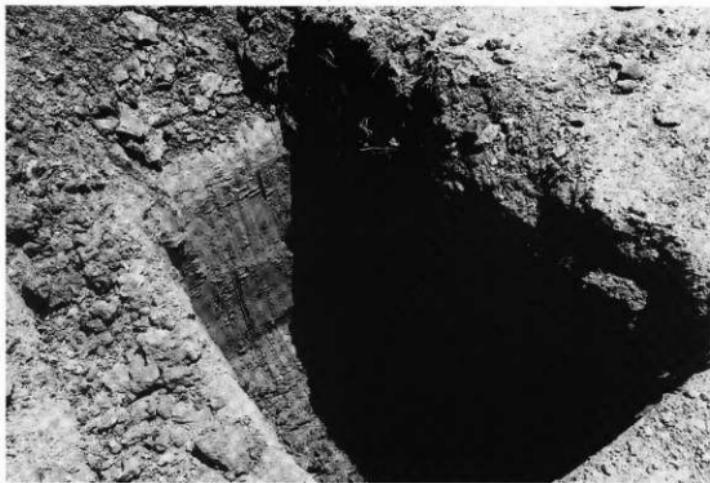
図版 1
吉志部遺跡（平成10年度）



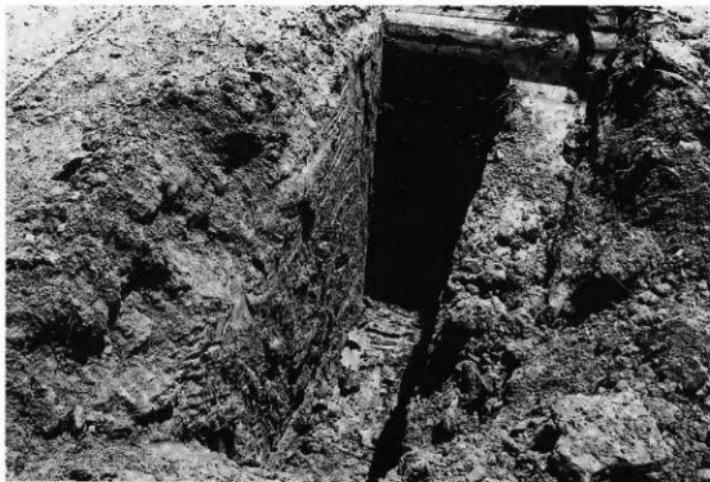
T 1 (南から)



土層堆積状況（西壁）



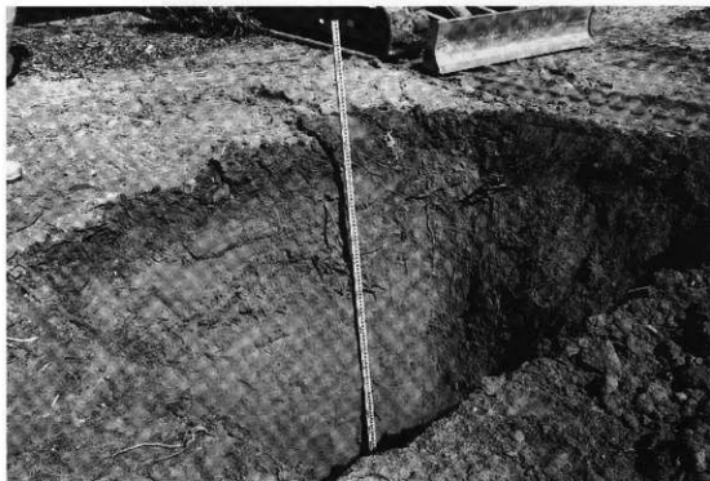
T 1 (北から)



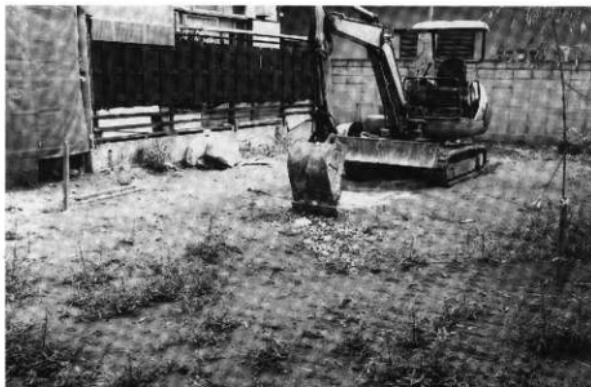
T 2 (北から)



T 1 (南から)



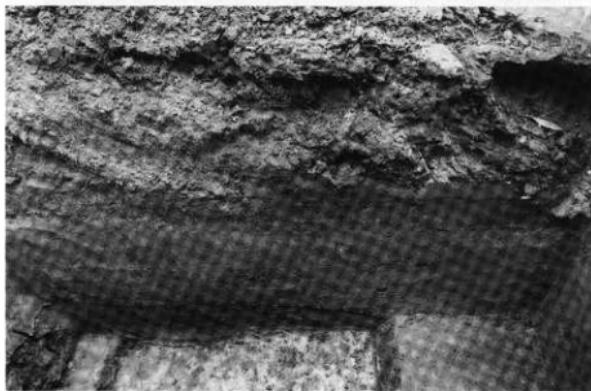
T 2 (南から)



調査前風景（北東から）



造構面検出状況（北から）



調査区南壁土層断面



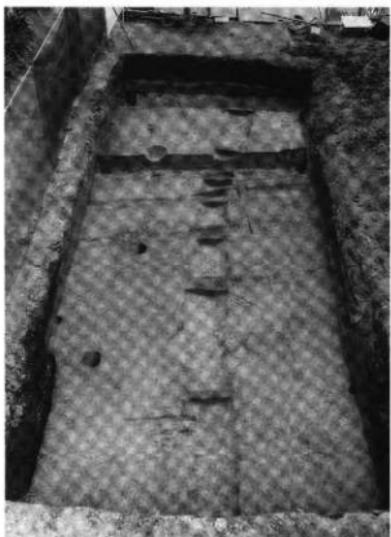
調査前風景（北西から）



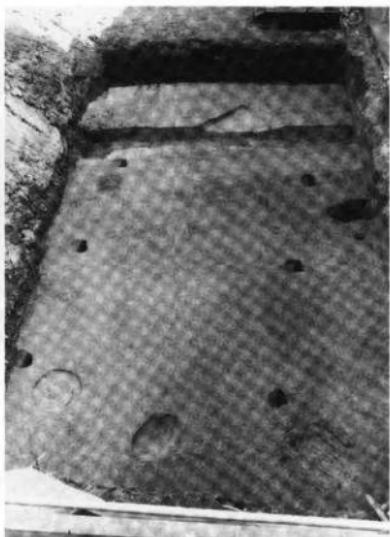
G 1 第1次造構面全景（北から）



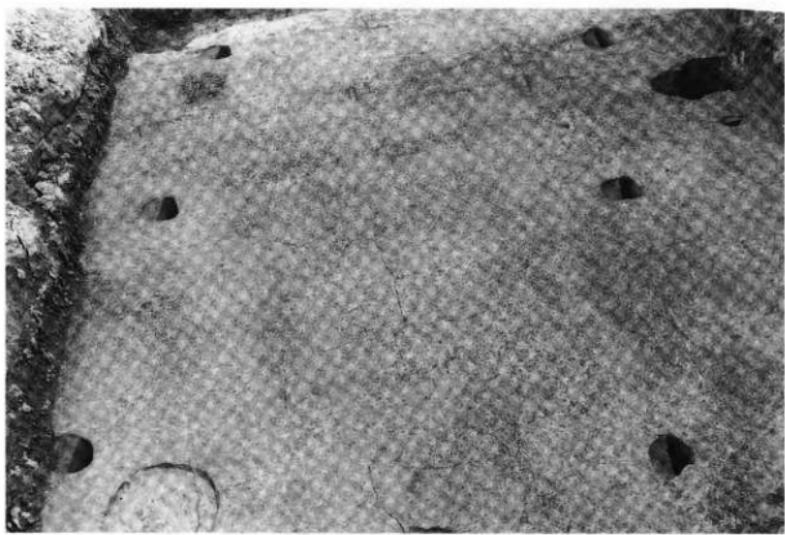
G 2 第1次造構面全景（北から）



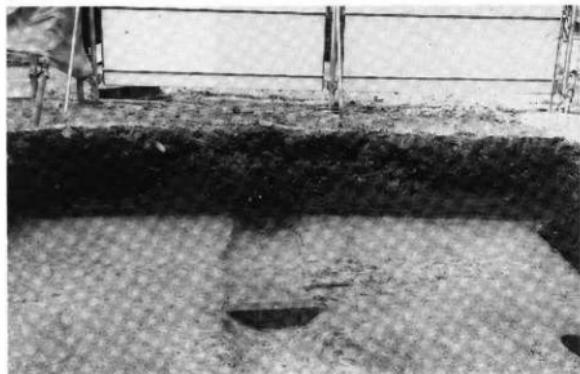
G 1 第 2・3 次遺構面全景（北から）



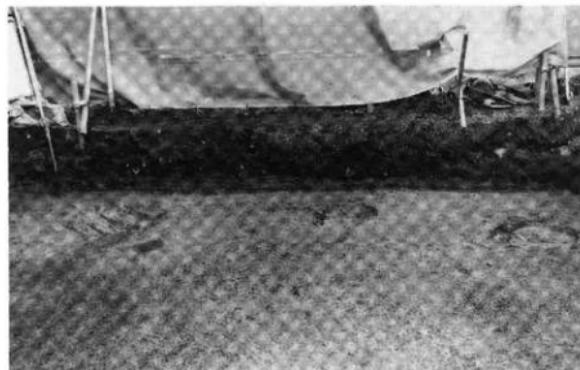
G 2 第 2・3 次遺構面全景（北から）



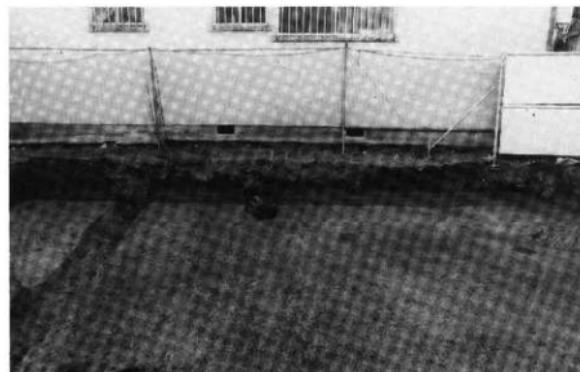
建物跡検出状況（北から）



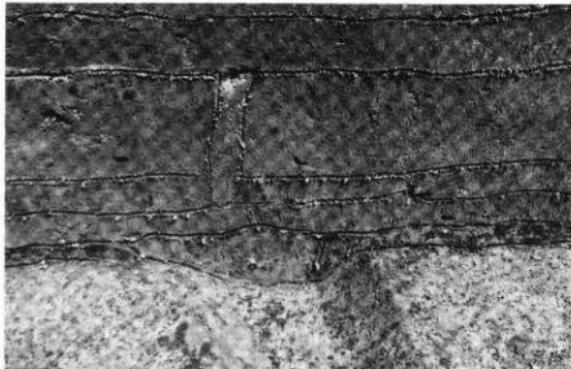
北壁東側断面 (G 1)



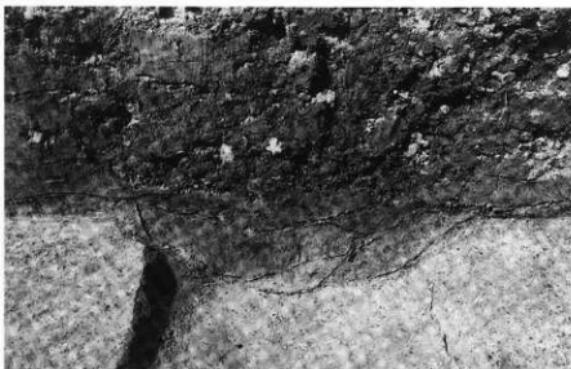
北壁西侧断面 (G 2)



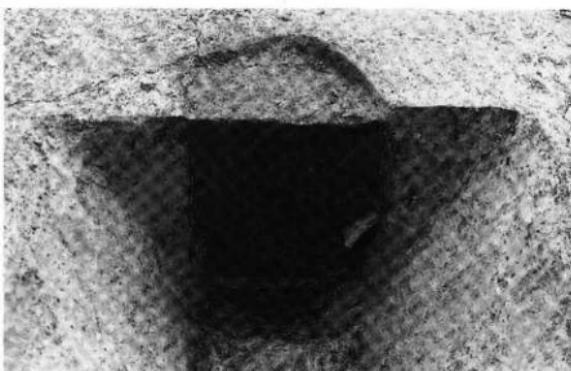
西壁断面 (G 2)



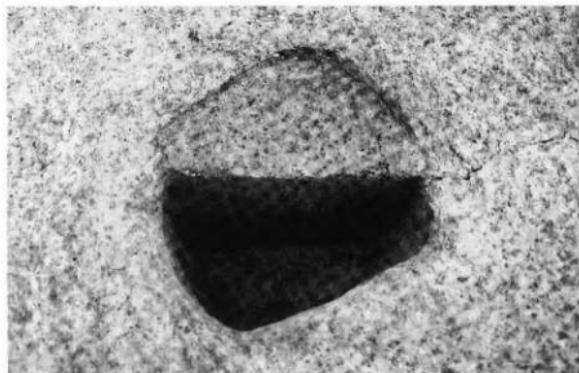
溝55内埋土検出状況



溝71内埋土検出状況



P79土層断面（西から）



P76検出状況（西から）



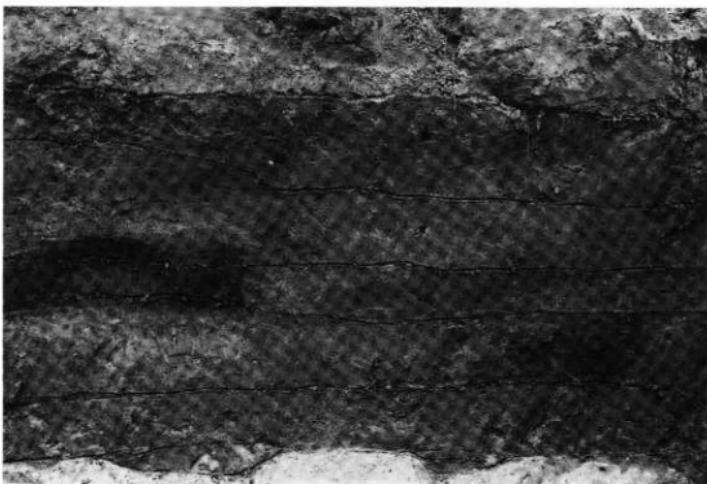
調査風景



市内小学校からの見学会風景



遺構検出状況（北から）



土層堆積状況（西壁北側部分）



調査前風景（西から）



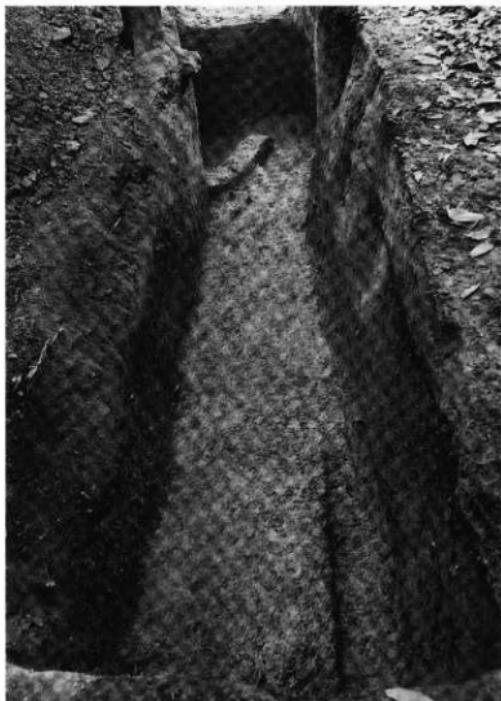
T1 横穴式石室（南から）



横穴式石室 近景（南から）



横穴式石室 東部（東から）



T 2 (北東から)



T 2 土層断面 (東から)



T 3 土層断面（南西から）



T 4 （南西から）

〔平成11年度〕

埋蔵文化財緊急発掘調査概報

吉志部遺跡
垂水遺跡
高城B遺跡
高城遺跡
吉志部古墳

平成12年3月31日

編集 吹田市泉町1丁目3番40号
発行 吹田市教育委員会